

京都大学医学図書館における電子ブックの利用動向分析

渡邊 英理子
京都大学医学図書館

2010 年は「電子書籍元年」と呼ばれ、電子書籍への注目が高まったが、学術機関においても電子ブックの利用は定着しつつあるのだろうか。

京都大学では有料契約・無料公開の電子ブック含む多数の電子ブックを本学 OPAC に登録し、利用に供している。これらのタイトルのうち、特に医学図書館で契約している電子ブックのアクセス統計 (COUNTER Book Report 2) を中心に、2009 年から 2010 年にかけての電子ブックの利用数推移や分野での比較など、利用動向の分析を試みた。

ただし今回の調査分析だけでは、利用者の電子ブック利用動向やニーズを把握できたとはいえない。たとえば利用者が電子ブックを利用しない理由として以下のような原因が思いつくが、残念ながらそれを裏付けるまでの調査は行えなかった。

- ・ 利用者が必要とする資料の電子ブックが提供されていない (コンテンツの問題)
- ・ 電子ブックにアクセスしづらい。電子ブックの存在が周知されていない (提供方法の問題)
- ・ 電子版よりも冊子体の資料の方が利用しやすい (利用環境/デバイスの問題)

より詳細な分析を行い、利用者の電子ブックに対するニーズを把握するためには、今後も引き続きアクセス統計などをもとに利用動向を注視するとともに、利用者への聞き取り調査なども行う必要があるだろう。